

## 英国レジャー研究学会およびその年次大会について - 2008LSA 年次大会出席報告 -

○山崎律子（余暇問題研究所）、高橋和敏（余暇問題研究所）

### はじめに

かねがね、英国においてレジャー研究誌として“Journal of Leisure Studies”（季刊）が、Leisure Studies Association（以下 LSA と省略する）から出されていることを承知していた。これは、米国 NRPA の加盟団体のひとつ SPRE (Society of Professional Recreation Educators) の機関誌“Journal of Leisure Research”（季刊）に匹敵する質の高いレジャー・レクリエーション関係の研究誌である。

今回、LSA の年次大会が7月上旬に英国中西部のリバプールで開催されることを知り、インターネットの知識のみでは不十分と考え、実際に出席して、目の当たりに体験し、関係者とも会い、本学会大会に報告することが、個人にとっても、本学会にとっても有意義との決断に至った。

したがって、本報告は、英国における LSA の概要と今年の年次大会の要点を報告し、本学会運営の参考に資することを目的とする。

### 1. LSA とは

LSA は、1975 年にレジャー研究や直接的・間接的に関連する領域に携わる研究者、実践者、学生のために学際的な視点で会合やコミュニケーションの場を提供するために設立された。すなわち、①レジャー研究を培う、②レジャー研究を奨励しこの分野の教育を進展させる、③出版物や国際的ジャーナル“Leisure Studies”発刊によって討論を促進する、④現代的レジャー問題についての情報交換を刺激する、⑤政策によく反映させるためにレジャー研究知識を広める、などを目的としている。

現在の会長は、Scott Fleming で、カーディフにあるウエールズ大学スポーツ、体育、レクリエーション学部教授ということである。その事務局は、ブライトン大学チェルシー校にあり、局長は、Karl Spracklen、実質的にはブライトン大学の Myrene McFee が事務的処理を行なっている。

この学会の実質会員数は不明であるが、有料の研究誌や他の専門書を出版している関係から、その会員数はかなり多く、収入も会費以外の収入も見込まれることが推測される。いわゆる購読会員を含めてのことである。そのためか、Taylor & Francis という出版グループがこの学会のスポンサー（後援者）になっているということとその他のパートナーシップを組んでいることが運営面での余裕をもつ結果となっている。

### 2. 2008LSA 年次大会について

今回出席した 2008 LSA 年次大会は、3 日間の会期であった。会場は、リバプール・ジョン・ムーアズ大学であった。同大学の教育・地域・レジャー学部観光・消費者・食料研究センターの主管であった。大会テーマは“Community, Capital and Cultures: Leisure and Regeneration as Cultural Practice”（地域、資産、文化：レジャーと文化の再生）であった。すなわち、余暇（レジャー）と文化の視点から、文化遺産を保存しつつ地域再生

への道を模索するリバプールの直面している社会的課題にチャレンジする姿勢が明らかであった。基調講演でも、有名な文化遺産アルバートドックを中心にした観光開発地区が論じられた。

大会出席者は、各日約 100 名であった。少人数の学会大会の印象があった。聞くところによると、例年この程度の集まりという。しかし、EU になったためか、英国国内学会でも国際的であった。EU 各国からの出席をはじめ、北欧からも出席していた。アジアからはシンガポール、イランと日本のみであった。ちなみに出席国別を列記すると、下記のようなになる。

スウェーデン、ノールウェー、キプロス、イタリー、ポーランド、オランダ、  
ドイツ、フランス、イギリス、カナダ、アメリカ、オーストラリア、  
ニュージーランド、ガーナ、シンガポール、イラン、日本

日本を含めると 17 カ国を数えた。出席者総数のうち、少なくとも約 1 / 3 は、英国以外の国からの人たちであった。

参加登録費は、会員用、非会員用に大別されていた。さらに開催一ヶ月以前登録と一ヶ月以内登録と区別され、それぞれ登録費の金額に差があった。すなわち、会員一ヶ月以前登録費 280 ポンド、会員一ヶ月以内登録費 315 ポンド、非会員一ヶ月以前登録費 330 ポンド、非会員一ヶ月以内登録費 330 ポンドであった。加えるに 1 日出席のみの項目があった。たとえば会員一ヶ月以前登録費の 280 ポンドは日本円に換算すると 61,600 円となり、日本のそれと単純に比較するとかなり高額の登録費になる。(1 ポンド約 220 円として)

加えるに、主管大学の学生寮を利用して、学会大会出席者のための宿泊に便宜を図るために、宿泊費込みの登録カテゴリーがあった。

### 3. 一般発表傾向

会期 3 日間を通して、一般発表は 74 題であった。その内訳は、下表の通りである。

表 1 一般発表演題領域別分類表

|                  |    |
|------------------|----|
| 観光関係             | 23 |
| 運動・スポーツ・体力関係     | 9  |
| 地域開発関係           | 7  |
| イベント関係           | 5  |
| 文化遺産関係           | 4  |
| アミューズメント産業関係     | 4  |
| 音楽フェスト関係         | 4  |
| スポーツ産業関係         | 3  |
| レジャー欲求関係         | 3  |
| その他(上記に分類できないもの) | 12 |
| 計                | 74 |

そのうち観光(ツーリズム)を扱った研究がもっとも多く(23)、体力と運動・スポーツの問題を取り上げた研究も次に多かった(9)。とくに大会テーマの関係があらうかと推

測されるが、文化遺産や地域開発の問題も多く取り上げられていた。

中でも目を惹いた演題は、“Performing the Mecca of Extreme Sports”と題して、スウェーデン人とノールエー人の共同研究で、西ノールエーVossを冒険スポーツのメッカとして紹介しながら、崖上からのパラシュートダイビングを、先達のレジャー理論を論議して、そのスポーツの意義を検討していた。

次に挙げられる演題は、“Changing the Casting of the Bad Guy to Sustain Auschwitz Concentration Camp: a World Tourist Site Presenting Local's Dissonant Heritage”と題して、英国人が、現在荒廃が著しいオーシュビッツ収容所（第二次大戦中、ドイツ軍がユダヤ人虐殺で悪名を馳せた施設）の新しい姿、負の世界遺産として、各界が協力して残していくべきものと主張していた。

#### 4. 懇親行事について

研究発表と同時に大会前夜から毎日行なわれていた懇親行事に触れてみたい。

- 1) パブ・ナイト・・・出席者が前日にリバプール入りをするのに対しての配慮の行事が“Philharmonic Public House”での有志の自由な懇親会であった。20数人参加があった。
- 2) “The Ferry Across the Mersey”・・・第1日の夕刻に行なわれた。リバプール市街とマージー川をはさみ対岸の街を結ぶフェリーを借り切り、上流方向から外洋出口までのクルージングをして、リバプール発展の足跡を見ながら解説を聞いた。(夕食ビュッフェ付き)約50名の参加があった。
- 3) “Gala Dinner”・・・第2日目にあった。いわば大会夕食会である。ライムストリート駅の近くにあるホリデイイン(ホテル)が会場であった。

このように、出席者には、発表のみならず、年次大会の役割のひとつとして懇親の機会を多く提供していた。

#### 5. 考察および所感

以上年次大会概要を挙げたが、これら、学会員にとっても学会の運営にとっても参考になると思われる諸点を考察することにした。

- 1) LSAは、決して大きな学会ではない。しかしながら、国内学会といっても、少なくとも10カ国以上からの会員を擁している。したがって、国際的な学会組織といっても誰もが異論はもたないようである。前述に関係があるかと思われるが地理的環境や歴史的・民族的・言語的環境が重要な要因であろう。
- 2) またLSAは、質の高い専門ジャーナルや出版物を出している。これには、出版社をバックに運営している。推測するに、いわゆる両者間にギブアンドテイクの関係を保っているように思える。すなわち、一方的にスポンサーになるわけではなく、会員からの情報があって、しかも出版を容易にできる環境づくりがなされている。さらに運営にはボランティアばかりではなく、事務局には、専門的に事務的処理をしているスタッフがいることも見逃せない。
- 3) 年次大会開催通知は、ホームページを通して、インターネット上でのみ行なわれ、申込みおよび登録費の支払いもインターネットで行なわれた。効率・費用の点からも推奨に値する。
- 4) 登録費について・・・本学会の参加費と較べて、かなり高額になるが、決めの細かさ

がある。さらに参加の自由性がある。これを本学会大会に適用しようと思っても無理がある。このことは、将来を見据えて、考えの中に置くことがよいように思われる。

5) 大会テーマについて・・・LSA は、主管校にまかされている。主管校やその地域が直面している課題の特色を生かし、大会でその解決の糸口を発見できる可能性があることも参考になる。それは大会のプログラミングに直接関係する。

6) 大会プログラミングについて・・・年次大会開会については、簡単な挨拶程度で堅苦しくなく、時間的にも短かった。シンポジウム形式はなく、テーマに即したキーノート発表があったのみであった。一般発表も、少人数のせい、1題につき30分とってあった。発表は15分～20分で、発表者の判断にゆだねられ、質疑応答がその直ぐ後に続く。日本の通例のようにベルの合図がなかったのも形式的ではないように思えた。また、前日から懇親のプログラムがあり、ごくインフォーマルであり、参加しやすかった。

7) 一般発表について・・・ごく表面的ではあるが、次の感触を得た。

(1) 高齢者問題の演題は皆無であった。

(2) 観光問題あるいは観光と文化の問題について論じられる演題が多かった。

(3) 観光産業、スポーツ産業、アミューズメント産業、音楽フェスティバル関係の演題も多くあった。

(4) 全般的に着想が豊かであり、現実的問題解決志向であった。

(5) パワーポイントの使用が通常化していた。DVDの両用も通常化していた。

(6) 質疑応答は、率直に質問し、応答も堅苦しさを感じさせなかった。

8) 全般的な印象・・・主管校の実行委員長をはじめ事務局の先生方は全般的に全体に目を配っていたが、個々人にも気を使っている感じが感じられ、出席していても心地よかった。大会テーマにしても、発表内容にしても、現実を直視しながら問題を解決しようとして、社会にアピールしていこうという姿勢が熱く感じられた。

## 6. むすび

以上、英国におけるレジャー研究学会およびその2008大会の概要を報告してきたが、強く感じられることは、ヨーロッパにおいては、日常的に国際化しているという事実である。本学会員としても、できるだけ機会を捉えて、発表するとともに実際体験をしたい。

(注) 2009LSA Conference は、次の通り行なわれます。

期日：2009年7月7日～9日、 会場：Canterbury Christ Church University  
カンタベリーは、ロンドンの南東90キロのところですよ。